

桂太郎の最後の訪欧について

はじめに

陸軍大将・公爵桂太郎が最後のヨーロッパ外遊に出発したのは、1912年7月であった。それは彼の4回目の訪欧であり、彼とともに、前大蔵大臣・若槻礼次郎、前逓信大臣・初代内閣鉄道院総裁・後藤新平など、桂に最も近い官僚を伴っての旅行であった。旅行の目的は、西洋の政治家との会見・交流及び昔の友人との再会であり、西洋の政党制度の研究も目的の1つであったとされている。

1912年の国際情勢は緊迫の度を増していたといえよう。ヨーロッパ列強は2つの陣営に分かれており、ドイツ・オーストリアと、イギリス・フランス・ロシアとの間に緊張が高まりつつあった。イギリスの同盟国であった日本は、1905年の日露戦争での勝利、また1910年の韓国併合によって東アジアで列強としての地位を高めた。同時に、隣国の中国で前年の辛亥革命の結果、清朝が打倒され、1912年に中華民国が成立したにもかかわらず、国内の混乱状態が続いていた。日本は1911年7月に第3次日英同盟協約、1912年7月に第3次日露協約を調印したが、その時期までに日英同盟の空文化が相当進んでいたという心配の声も上がっていた。

桂らがサンクトペテルブルクに着いてすぐに、明治天皇の健康状態が悪化したとの知らせが入り、彼らは帰国を決定した。しかし、天皇の崩御に間に合わず、崩御の際にはまだロシアにいた。日本に到着すると、桂は元老・山県有朋によって内大臣兼侍従長として宮中に押し込まれたことを知るのである。山県の動きは桂の政治活動を制限することになったが、彼を政界から疎外したほかに、宮中・府中の別が乱れることを恐れた世論の不满を招く結果となった。

本稿では、桂の欧州訪問を詳細に分析し、桂が外遊によって何を実現しようとしていたのかを追究するとともに、彼の宮中入りの背景にあった要因、桂がその任命を受けた理由を明確にする。当時の日本国内外の新聞紙上で、この旅行について数多くの憶測が飛び交い、それが途中で

急に中断となったため、その「憶測」に真実味がどの程度あったのか、断定することが難しい。筆者は本稿で、一味違うアプローチに挑戦し、新しい角度からこの問題を見る。そのアプローチとは、渡欧そのものより、渡欧準備の成り行きを分析し、桂の目的について考察するものである。「桂太郎関係文書」に含まれている書簡は、その準備の様子を把握するのに特に貴重な史料であろう。筆者はまた、桂の宮中入りを囲む事情に関する書簡、日記、回想録などを分析し、なぜ政治活動の復活を計った桂が侍従長の任命を断らなかつたかという謎を解き明かす。

日本政治史において桂のヨーロッパ旅行が重要であった理由は、2つ挙げられる。1つは、日本政界に占めた桂太郎の地位である。桂は、当時まだ影響力が強かった長州派の中で、山県有朋に次ぐナンバー・ツーであり、内閣総理大臣、台湾総督、陸軍大臣などを歴任した。なお、総理大臣のポストに就いていた時期は、1901年6月2日から1906年1月7日、1908年7月14日から1911年8月30日、1912年12月21日から1913年2月20日であり、1901年7月から1913年2月にかけての140ヶ月の内、およそ95ヶ月は、日本の政治が桂総理の支配下にあった。その在任期間は、現在でも日本の内閣史における総理大臣の最長在職期間記録である。日英同盟の締結、日露戦争の勝利、韓国併合は、桂政権に当たる。

もう1つの理由は、1912年後半に起こった政治状況の変更である。桂の宮中入りにより政界の再編成が起こり、彼の政治キャリアが崩れ始めた。桂の代わりに初代朝鮮総督・陸軍大将寺内正毅が長州派のナンバー・ツーの地位に立った。

陸軍の二個師団増設要求の問題が発生したのも、そのころであった。1912年後半は、衆議院の議席の過半数を占めた政友会を与党とする第2次西園寺内閣に対する陸軍の圧力が高まった。これに対して内閣は財政緊縮を理由に朝鮮に師団を2つ新設常置するという陸軍の要求を拒否した。

陸軍において西園寺内閣に不満を感じ、その代わりに総理大臣として寺内を好んだグループがあり、また増師要求によって西園寺内閣を倒し、寺内を後継総理大臣にする計画が陸軍内で実際に作成され、政府と陸軍の対立が激しさを増しつつあった。上原勇作陸軍大臣の辞職後、陸軍は軍部大臣現役武官制を利用し、後任を推薦しなかつたため内閣は行き詰まり、1912年12月に総辞職するに至った。

寺内を首相にしようとするグループの期待と違って、西園寺の後継者に桂太郎が任命されたが、新総理は組閣の前から世論の激しい非難攻撃の的となった。西園寺内閣の倒閣が「毒殺」と見なされて世間の憤慨を引き起こし、長州派・陸軍出身の桂はその主要責任者の一人とされた。さらに宮中から出た桂の首相就任は、宮中・府中の別を乱す非立憲的行為として批判された。すぐに憲政擁護運動が開始され、藩閥政治に反発する民衆がそれに数多く参加した。1913年2月に、全国に広がった暴動の影響で桂内閣は総辞職に追い込まれた。桂の後任者として海軍大将・山

本権兵衛が首相に任命された。山本は、1898年以降初めての、薩摩藩出身の総理大臣であった¹。

欧州旅行をめぐる状況と背景

『西園寺公望自傳』には、大正政変期の桂太郎について次のような一文が記されている。「要するに桂が洋行して、うちを明けたのが失策だった、留守にしさえねば、あんな事はなかつた」²。西園寺の言葉によれば、第3次内閣のころ桂が直面したあらゆる問題は、1912年7月のヨーロッパ訪問にその起源を持っていたことになる。この言葉をどのように理解すればいいのか。『西園寺公望自傳』の続きを見ると、「〔桂が〕公爵になったのも余計だったね、そんなこともいくらか山県の気に喰わなかつたらう」³とある。当時の桂派と山県派の間には疎隔が生じていたため、西園寺の言葉は、山県は桂の影響力の拡大を憎んでいたということの意味し、桂の外遊は、山県にとって桂の政治的地位を弱める絶好の機会となったということになる。

その頃の政界の雰囲気も、桂の渡欧に好都合ではなかった。1911年8月桂が西園寺に政権を譲った時、第2次西園寺内閣は健全財政主義に基づく政綱を発表した。各省の予算が削減され、内務省の積極政策の要求や陸軍の軍拡の要求が退けられたが、海軍だけが特別扱いを受け、建艦計画を実施するために多額の予算が与えられた⁴。しかし海軍軍拡には賛成したとしても、政府は緊縮財政方針を維持し、大蔵大臣には財政整理の支持者であった山本達雄が任命された。その時、陸軍側⁵が新規師団増設の

¹ 第2次西園寺内閣が1912年12月に毒殺された政変及び第3次桂内閣が1913年2月に倒された政変（いわゆる「大正政変」）は、多数の先行研究において詳細に論じられている。その中で、山本四郎『大正政変の基礎的研究』（1970）、坂野潤治『大正政変』（1994）は、最も主要なものである。桂太郎の生涯に関する研究書として、Stewart Lone, *Army, Empire and Politics in Meiji Japan* (2000)、小林道彦『桂太郎』（2006）、千葉功『桂太郎』（2012）などが挙げられる。長州派内の動き・再編成について、内藤一成『貴族院と立憲政治』（2005）を参照。西園寺内閣の崩壊過程、なお寺内正毅のその役割については、由井正臣「二個師団増設問題と軍部」（1970）、北岡伸一『日本陸軍と大陸政策』（1978）、桜井良樹『大正政治史の出発』（1997）、などを参照。本稿では、桂の渡欧及び侍従長任命に注目する。

² 西園寺・小泉・木村1949：164。

³ 同上。

⁴ 日露戦争後の軍拡は、はじめは陸主海従で進められた。しかしドレッドノート級戦艦の登場（1906年）は、国際的な戦艦の建艦競争を激しくし、日本海軍の戦艦を全て旧式としてしまった。第2次桂内閣は、海軍が提案した建艦計画に応じなかったが、それが政友会と海軍との接近を招いた。第2次西園寺内閣の海軍優先の軍拡政策は、その接近の結果であったと考えられる（山本1970：44-45、小林2006：256-258、など）。

⁵ 1912年4月、石本新六陸相が在任中に死去した。桂は、その後任として木越安綱を望んでいたが、結局西園寺のフランス留学時の友人、上原勇作が新しい陸軍大臣に選

主張を出していたにもかかわらず、蔵相はそれに対して強く反対し、軍拡の要求を拒んだ。

1912年5月の衆議院総選挙では、議会第1党であった政友会が圧勝し、総議席数381のうち209議席を獲得した（2議席増）。一方、国民党は議員を87人から95人に増やし、桂内閣の与党であった中央俱樂部が獲得したのは30議席だけであった（20議席減）。陸軍にとっては、選挙の結果が心配の種となった。彼らは政友会と海軍の連携を、陸軍と国家の安全にとって危険と見なし、可能な限りその連携政策を中止させようとしていた。

1912年前半に日本の政界は内閣と官僚派との緊張が強まることによって安定を失いつつあった。ほとんどの先行研究はこの点で一致しており、筆者もそれに関して異論を唱えるつもりはない。歴史家の山本四郎は、その状態を次のように簡潔にまとめている。「明治天皇の危篤以前において、内閣対官僚の対抗関係、これに対する世論の内閣への同情と官僚系への憎悪、かなり明瞭な形をとっている。明治天皇の死後は、簡単に割り切れば、上述の形勢が拡大再生産されるのであるから、破局は時間の問題ともいえるのである」⁶。

そのような不安定な政治情勢の中で1912年7月6日夕方、桂太郎は後藤新平、若槻礼次郎らに随行され、4回目の外遊に出発した⁷。一行は、まず東京の新橋駅から汽車で神戸に向かった。8日神戸で船・天草丸に乗り、9日に日清講和条約の締結会場として知られていた下関の旅館・春帆楼で送別会を開いた。翌日大連に赴き、そこから貸し切りの特別列車で満州・シベリアを経て、21日に旅行の第1の目的地、ロシアの首都ペテルブルクに着いた。

若槻は、1950年に出版されたメモワール『古風庵回顧録』で、旅行の様子について次のように語った。

桂公は碁や将棋もやらんから、一同喫煙室に集まって、後藤の連れて行った森という男などに、ドイツの新刊書を翻訳解説させて、それを聴くことを日課のようにしていた（…）私はほとんどその傍聴の仲間に加わらず、独り自分の部屋に寝転んで、本を読んだり、外務省の電報文書を読んでいた。これは外務省が、青刷りにして関係大臣などに配ったもので、それを一纏めにしたものを、桂公から読んでくれと行って渡されたのだ。そ

ばれることとなった。上原は薩摩出身であり、「反長州」と見なされていたので、この人事は世論から好評を博したが、上原は既に寺内正毅、田中義一と親密な関係を築いており、増師要求の責任者の1人となった（山本1970：51-61、など）。

⁶ 同上、74-75

⁷ 随行者の中に、後藤と若槻の他、代議士・岩下清周、桂の秘書・杉梅三郎、岩下の婿・山下三郎、南満洲鉄道理事・龍居頼三、外交官の田付七太、後藤新平の腹心でロシア語通訳の夏秋亀一、そして陸軍代表の畑英太郎少佐がいた（三宅1949：136、若槻1950：180）。

それはあとから考えれば、大した参考になるものではなかったが、私はそれを忠実に読んでいた⁸。

桂の4回目の洋行とはいえ、それまでの3回の目的地はプロイセンのみであった。彼はドイツ文化の深い知識を持ち、ドイツ語が流暢であった⁹が、今回の旅を機に、他にロシア、イギリスなどの訪問を計画していた。ロシア事情に詳しい後藤新平が同行で、ロンドンで駐英公使・加藤高明が桂らを待っていたのも、そのためであった。

1909年にハルビンで日本の初代総理大臣・伊藤博文が韓国の民族運動家・安重根によって暗殺された事件の影響もあり、桂の訪欧に強い警戒感が伴った。桂は韓国併合の首謀者と思われており、満州・シベリアはもちろん、ヨーロッパの各都市でも桂の殺害を共謀する朝鮮人がいる危険性が低くないとの意見もあった¹⁰。それがために、桂らが移動する国家の当局は反テロの準備を厳重にし、警戒態勢をとっていたのである。当時の名記者・三宅雪嶺は、桂一行が満州を渡る事情を次のように描いた。

〔七月〕十二日大連着、翌日長春着、哈爾濱〔ハルビン〕より民政長官、検事長等が来り迎へ、兵士を鉄道線路に配置し、護衛兵を列車内に乗込ませ、付近の朝鮮人に前日より検束を加へ、松花江橋梁の上下流に砲艦四隻を碇泊せしむ。（一行の搭乗せる臨時列車到着前三十分より発車まで、埠頭区及び停車場に至る道路は交通を遮断し、構内に於ける数千の車輛を一々検査し封印する等、用意周密到らざる所なし¹¹。）

前首相の渡欧であったため、世論のみならず、政界・宮中からも相当の注目を浴びた。明治天皇自身は、7月2日桂を謁見に招き、彼の旅行に強い興味を示した。日本政治史の研究者・小林道彦は天皇が桂に特別の好意を示したと述べている。「七月二日、桂は暇を奏するため宮中に参内した。天皇は交肴一折、清酒一樽を下賜し、さらに金一万五〇〇〇円（現在の約二億円）を旅費に加えさせた。これは元老筆頭であった伊藤に次ぐ優遇である」¹²。

内外世論の反応

桂のヨーロッパ旅行の目的については、様々な憶測が飛び交っていた。『時事新報』のように、桂の旅行が「私的訪問」の範囲を越え、「

⁸ 若槻1950：180-181。

⁹ 小林2006：265-266。

¹⁰ 千葉2012：186。

¹¹ 三宅1949：136。

¹² 小林2006：267。

欧州各国首府に於ては此の訪問が重大なる結果を齎す可きを予期し居り今日は極東に於ける日露の地位を定む可き好機会なりと考へらる」¹³と、日本外交にとって重要な出来事となると判断する声もあった。それに対して、世論の懸念を映す代表的なものとしては、6月7日の『東京朝日新聞』の記事が挙げられる。『東京朝日』は、桂の渡欧の背後に秘められた底意があると論じた。

官僚派の一角には政府は到底世人の期待するが如き行政整理を実現すること覚束なく随つて来年度予算編成難を告げ九月の頃に至れば内閣瓦解の外なかるべしと推測し居れるが行政整理特に陸軍費削減に就き西園寺侯は或は桂公に助力を乞ふやも知れず公内地に在りて何等の助力を与へず西園寺内閣を見殺にするは桂園公侯従来の関係并に桂公が将来政友会を操縦する上に於て甚だ面白からざることとなるを以て官僚派挙つて公の外遊の志望あるを幸ひ俄かに外遊を思ひ立たしめたるものにして公自身に於ても内閣の瓦解を看過して其俣自ら取つて代るよりも海外に於て召命に接して急ぎ帰国し余儀なく後を引き受くるが如き形情を装ふを利益なりとなし俄かに外遊を思ひ立ちたる訳なりと云ふものあり¹⁴。

憶測は日本に止まらず、イギリス、ロシアなど、旅の目的地にも及んだ。特に同7月に秘密裏に調印された、内モンゴにおける両国の利益を東西に分割する第3次日露協約は、欧米において旅行の本当の理由に対する疑惑を生じた。当時の駐英公使、加藤高明は7月19日に桂に書簡を送り、その中で次のように述べている。

閣下の御遊欧は何等政治上の意味を帯ひさるものなる次第は、曩に外相より通知有之、又閣下本邦御出発前屢々御明言相成りたる容子なるも、仲々世間は承知不致、内外新聞紙に種々推測談掲載せられ候ことは、疾く御承知の通りに御座候¹⁵。

加藤は同じ内容を内田康哉外務大臣宛の報告書に記し、そのコピーを翌20日に桂にも送った¹⁶。その報告書は、日本の新聞が桂の旅行に関する「種々ノ憶説」を載せた結果、イギリスにそれが伝わり、地元新聞も根拠のない風説を紙上に掲載したのだと述べていた。

新聞紙上の憶測が無用の誤解を産まぬように、日本大使館は英国側に「桂公爵ハ現ニ野ニ在リ何等政府ト公ケノ関係ナキモ、(…)同公ハ多年総理大臣ヲ務メラレタル関係モアレバ重要ナル外交問題ニ付テハ時

¹³ 「桂公に注目す」1912年7月22日付。

¹⁴ 「桂公の外遊と政界」1912年6月7日付。

¹⁵ 千葉2010：125-126。

¹⁶ 同上、126-135。

々総理大臣ヨリ之ヲ同公爵ニ内話スル様ノコトハ或ハ可有之」と桂太郎の日本政界における役割を強調しながら、桂のヨーロッパ訪問に政治上の意味がないことを通知した。報道機関にもそれが伝えられたにもかかわらず、様々な噂の広がりや止めるには至らなかった。加藤は『タイムズ』の記者の例を挙げている。彼は桂の旅行に関する取材のために日本大使館を訪問し、桂が「単ニ多年ノ宿望ニ依リ欧州諸国ヲ漫遊セラルハニ過キシテ何等政治的的使命ヲ帯ブルコトナシ」と聞かされた。しかし、その後『タイムズ』紙上に「過般日露ノ間ニ内蒙古ニ関スル協約締結」がなされたなどと、憶測記事はとまらなかつた。

加藤は桂宛の手紙に報告書のコピーの他、問題となった『タイムズ』の切り抜きをも同封した。ロンドン的高级紙に掲載された桂の旅行の解説記事は、イギリスのジャーナリストが桂の渡欧は日露関係の良化を意味するとの意見を共有していたことを示している。中には「Objects of the Visit」（「訪欧の目的」）のように、日露協約の締結が決定され、桂がその調印のためにペテルブルクに赴いたと誤った主張をする記事もあったが、日露協力の深化は否めない事実であると述べられていた。日本はイギリスの同盟国ではあるが、桂が今回イギリスに対して特に用事がないことを考えると、旅行の第1目的がロシアとの関係調整にほかならないとする意見もあった。

「The Anglo-Japanese Alliance」（「日英同盟」）、「Prince Katsura's Mission」（「桂公の使節団」）などの記事によると、この数年間に国際情勢が大きく変動しており、ロシア・日本両国で親日・親露の傾向が強まり、新しい同盟の基盤が形成されつつあるとし、今回の桂の旅行がただの「漫遊」に過ぎないという、日本側の主張は信じ難い。日露の間で政治・経済上の関係が盛んになり、また中国の辛亥革命により両国の協力関係が新しい枠組みを求めていることからすると、桂の訪欧は日露関係の強化をめざすものと考えられると論じている。

「The Anglo-Japanese Alliance」の著者は、日露協約が日英同盟と並んで極東の平和を維持する「二つ目の柱」となり、その役割が一層高まることを予測していた。同じ記事では、後藤新平とロシアの外相・セルゲイ・ドミトリーエフ・サゾノフとの友誼関係が指摘されている。また「Relations of Russia and Japan. The Mongolian Question」（「日露関係—蒙古問題」）は、旅行の目的が日露の満州・蒙古における利害調整にあると述べている。

切り抜きの中で特に注目すべき記事は、「Japanese Anticipation」（「日本人の予測」）と題するもので、6月10日、旅行の1ヶ月程前に在日特派員から送られた報告記事である。桂が渡欧の計画を発表した時の日本人の反応を描いており、発表がなされた途端、驚きの声があがると共に旅の目的についての様々な噂が広がり、まずは、既に2回首相のポストに就いた桂は、最早すべての政治的野心を達成し、単に気晴らし旅行に出発するのだろうとの推測が流れたが、それとは違う説も述べられていると

して、そのいくつかが紹介されている。西園寺内閣の行政財政整理が失敗に終わる時に、桂が日本にいたくないからだとする説、桂が西園寺首相から重要な外交使命を担って出発したとする説、桂が旅行中に欧米の外交を研究し、帰国してから西園寺内閣の外務大臣に任命されるという説、そして西洋の議会政治体制を調査した上で政党政治家に転向し、西園寺より政友会総裁の地位を譲られる予定であるとする説さえあった。

上記と同じような内容の報告は、サゾノフ外務大臣と駐日ロシア大使・ニコライ・マレフスキー＝マレヴィチとの文通にも見られる。1912年5月27日〔西暦6月9日〕付けサゾノフ宛の書簡¹⁷でマレフスキー＝マレヴィチは、桂の渡欧について報告した。桂本人は、それが公務上の旅行ではないと主張しているが、天皇自身はその旅行に許可を下したと内密にマレフスキー＝マレヴィチに伝えている。ロシア大使は、旅行の背後に何等かの秘密の政治的使命があるのではないかと推し量り、また桂のロシア訪問が日露関係を深め、革命後の中国における両国の利害を調整するいい機会であるとの意見を述べた。

6月1日〔西暦6月14日〕付けの書簡¹⁸でマレフスキー＝マレヴィチは、桂の旅の目的について報告を続け、サゾノフに日本の新聞に掲載されている憶測をまとめ、その要約を書いて送った。『朝日新聞』の記事は、西園寺内閣が実施しつつある財政整理の失敗を予測していた。西園寺が行き詰まる時、友情関係にある桂に援助を請うに違いない。しかし桂は、西園寺の友人であるとしても、同時に政敵でもあるため、必死にそれを避けたがっていた。ヨーロッパ旅行に出かけた真の原因はそこにあるのではないか。西園寺内閣が倒れると、桂は帰国し、新総理になる。後藤新平は、新しい内閣の外務大臣に任命されるだろうと予想していた。

一方『日本』は、財政整理を催促する内閣と陸軍の衝突が不可避であるとし、近づく政争を前に陸軍派の1人である桂は、西園寺と手を組んで陸軍を攻めることはできず、板挟みを避けるために旅行に出発するのだと推測した。逆に『時事新報』は、桂には西園寺の後継者になる意志がまったくなく、それを明確に示すために日本を発つのだと主張していた。『時事新報』によると、桂は将来日本の政治で重要な役割を果たすに違いないが、今回の渡欧は、そのための準備として考えるべきであり、28年ぶりにヨーロッパを訪問する桂は、もはや軍人としてではなく、既に2回総理大臣を務めた為政者として旅行するのであると、その目的を論じていた。

書簡の最後に『東京日々新聞』の意見がまとめられている。それは、桂の旅行はただの漫遊であるとはいえず、ロシアを始め、ドイツ、フランス、イギリスなど、桂と後藤らが訪問する国家のリストを見ると、彼らが何か外交使命を委ねられたのではないかと考えられるとしている。

¹⁷ Molodiakov 2005: 63-65.

¹⁸ Ibid., 65-67.

旅行中に桂がヨーロッパ諸国のリーダーと秘密談をするのは、確かであり、また中国で自分の位置を強化しようと望むアメリカは、今回の旅に不満を起す恐れがあるが、記者は桂が巧妙な政治家としてその不満を解消できると論じていた。

目的地の1つであったドイツでも、桂の訪欧が政界と世論の不安を招いた。駐ドイツ大使館参事官・畑良太郎は1912年7月25日の書簡¹⁹で桂に次のように報告している。

新聞紙は閣下今回之御旅行は非常に重大なる政治的使命を有し、就中露都に於て日露協約若しくは日露同盟を結ぶか為なるものゝ如く思惟致居り候。将又小生昨日外務大臣代理に面会の際、同代理は日露之協約と公爵露京訪問とを聯結して談及致候に付、所謂日露協約なるものに関しては訓令通りに挨拶すると同時に、閣下御旅行の目的は漫遊なる旨を申聴け、何等政治上之使命を帯ひられざる旨を言明致し候へ共、同代理は之れを信せざるの態度を示せる而已ならず、日露両国に依りて支那分割の端緒開かる可しとの懸念より聊か不安之体に相見へ申候。要するに閣下今回之御来欧目的は政治的使命を果たすにありて、就中日露間の協約若しくは同盟にありとは当国一般の見解に有之候。

欧州旅行の目的について

しかし、桂陣営は彼の渡欧をどのように考えたのか。随行者の一人であった若槻礼次郎は、『古風庵回顧録』²⁰にその旅行の目的は3つあったと述べ、次のように説明している。「私が直接桂公から聴いたのであるが、第一は、ロシアの政治家と腹藏のない話合いをすること。日露戦後のわだかまりがいつまでも残っているようでは両国のために宜しくない。両国の利害が衝突しないよう、将来摩擦の起こらないよう、国交を調整したい」というものであった。ロシアの政界と太いパイプをもつ後藤新平が旅行に誘われたのはそのためでもあったと言える。

第2の目的は、英国の政党の調査であった。若槻の記憶によると、桂は「イギリスの政党といっても、表面のことはこちらでも判っている。しかしどういうようにして政党を維持しているか、政党の楽屋はどんなものか、また保守党と自由党の政権の授受の工合など、向うの政治家と接触して、親しく入って見て来たい」と言っていたという²¹。

¹⁹ 千葉2010：302-304。

²⁰ 若槻1950：177-179。

²¹ 同じ『古風庵回顧録』で若槻は、旅行前に桂が「外国の政党の模様などを調べて、それを参考にして行きたい」と、政党を作る意思を明治天皇にはっきりと伝えたと主張している（同上、178-179）。

最後に目的の3つ目はドイツで皇帝と会い、1ヶ月から1ヶ月半程度ゆっくり遊ぶだけのことであった。若槻は「予てからカイゼル（独逸皇帝）が桂公に、ドイツに遊びにくるよう勧められていた。いよいよ外遊するについては、それに応えたい」との桂の意図を明らかにしている²²。

ここで、第2の目的についてやや詳しく説明する必要がある。桂は、第2次内閣のころから政友会の優勢に対抗すべく、衆議院を制御する方法を模索していた。その政友会対策は、憲政本党、戊申倶楽部、大同倶楽部など、議会の非政友勢力を大同団結させ、その新しい組織によって政友会の優位を脅かそうとするものであった。しかし、内閣は予算問題で政友会の同意を確保できなければ、直ちに行き詰る状況に置かれていた。そのために反政友合同に踏み切るとは大きなリスクでもあった。結局、第2次桂内閣と政友会との関係は密接不離となり、非政友合同をあきらめた桂は「情意投合」を宣言した。これにより他の政党の影響力が大幅に制限されることになったが、非政友勢力との協力関係は断絶し、内閣の政友会依存は解消されることがなかった。

1910年に官僚党であった大同倶楽部は実業家の代議士らを集め、中央倶楽部を結成して、大浦兼武をその指導者とした。新しく組織された政党は桂内閣を支持し、衆議院における桂の別働隊として働いた。桂は大浦を通じて、財力を利用しながら中央倶楽部を操縦していた。「寺内正毅関係文書」には、桂首相が寺内朝鮮総督に送った1911年2月24日付け書簡がある。それによると、桂は中央倶楽部より1万円の出金を依頼され、自分ではその金額を手配することができなかったため、総督府の予算にその余裕がないかどうかを聞いたことがあったことがわかる²³。

そのような方法は政党政治からはほど遠く、他の政党には不道德と見なされた。しかしこのことは、1912年前半にすでに桂が議会において強い与党となりうる本格的な政党を結党する考えを抱いていたことを示すものと思われる。大正初期の陸軍を研究する桜井良樹は桂の旅行をその新党計画と結びつけ、いずれも政界のフィクサー、ジャーナリストで元衆議院議員の秋山定輔が関係していたことを指摘している。『大正政治史の出発』によると、秋山自身は1908年から1911年まで中国、ヨーロッパなどを訪問したが、帰国後「既

²² 桂の外遊について言及する先行研究のほとんどは、『古風庵回顧録』で書かれた若槻の言葉を持ち出し、上記の3つの目的を羅列するが、それぞれの解釈は多少異なるのである。山本四郎の『大正政変』及び桜井良樹の『大正政治史の出発』は、『古風庵回顧録』の他に鶴見祐輔著の後藤新平伝記を引用し、追加に4つめの目的、すなわちフランスで資本家・財政家と協議し、フランス融資の流入を確保することを挙げる。山本は、旅行の決断の理由は政党の研究ではなく、国際関係の調整、「中国問題」の解決にあったと主張するが、桜井、小林道彦、千葉攻、スチュアート・ローンは、外交調整の他にイギリスの政党制度の検討、日英同盟強化の試みをも桂の主な目的と見なす（山本1970：68-71、桜井1997：158-161、小林2006：264-266、千葉2012：187-188、Lone 2000：176-177）。

²³ 千葉2011：290。

成政党を改造して、挙国一致の国民的大政党を作ること」に専念した。そのため、「多年の政敵」であった桂と手を組み、後に桂新党の創立にも貢献した。桜井は、桂と秋山が妥協したのは「対中国問題と、それに対応する国内政治の改革問題」を解決するためであったと主張する。そして、桂が欧州旅行に行くことにしたのも、秋山の影響によるところ大であったとする。桜井はこの時桂が旅を選択した理由として2つが考えられるとし、「新政党組織の準備のためであり、また満州問題の解決方法についてロシアと会談するという目的を持っていた」と述べる²⁴。

桜井の考察は、若槻の言葉と一致する。ところが、明治天皇の重病のニュースで桂は帰国の決意をする外なく、訪欧を途中で中止し大急ぎでペテルブルクから日本に向かったため、若槻の回想が本当であったかどうかは確かめようがない。しかし、帰国までの旅行の経緯を分析すると、旅行の目的を推測できないわけではない。

まずは、「上原勇作関係文書」に含まれている「明治四十五年七月二十二日聖彼得堡〔サンクトペテルブルク〕エラーギン別荘に於ける桂公爵と露国総理大臣コフツォフ氏との会談要領」²⁵という資料を検討する。この資料は、桂とロシア首相・ウラジーミル・ニコラエヴィッチ・ココフツォフ伯爵との会談の内容をまとめたものであり、8月12日に桂が所有していた原本から書き写されたものである²⁶。

ロシア訪問中に行われた会談は、ココフツォフとの会談および7月26日のサゾノフ外相との会談²⁷のみであった。先に挙げた5月27日〔西暦6月9日〕にサゾノフに送られたマレフスキー＝マレヴィチの書簡²⁸によると、桂はロシア皇帝・ニコライ2世に謁見する希望を述べていた。同じく6月15日〔西暦6月28日〕付けの書簡²⁹でマレフスキー＝マレヴィチはサゾノフに、桂が皇帝陛下に謁見し首相と外相に面会したい意向であることを知らせた。ただし、ロシア皇帝との謁見は、結局実現するに至らなかった。

²⁴ 桜井1997：134-142。

²⁵ 1913年付上原勇作宛宇都宮太郎書簡（『上原勇作関係文書』2011：58-61）。この文書の冒頭欄外に「大正元年八月十二日桂公手交書類より写取り、原書同公へ返却」と注記され、内田外相の印があった。参謀本部第2部長・宇都宮は8月20日の日記に「陸軍大臣より、露都に於ける桂公と該首相との会談筆記を内示せらる」と記しており、「上原勇作関係文書」にあるこの文書は、上原から内示された宇都宮が上原に郵便で返却したものであると考えられる（宇都宮2007：140）。

²⁶ ココフツォフと桂の会談を23日とする説もある。桜井良樹の『大正政治史の出發』は、宇都宮が上原に送った写しのほか、別のコピーが存在していると指摘している。桜井は2つ目のコピーでは文字が若干異なるところがあるほか、日付が23日とされていることに注目した（桜井1997：165-166）。前掲桜井良樹、165-166註23を参照。なお『東京朝日新聞』も、その会談の日付を23日とする（1912年7月26日付）。

²⁷ 『東京朝日新聞』1912年7月29日付。

²⁸ Molodiakov 2005：63-65。

²⁹ Ibid., 70-72。

桂とココフツォフの会談、日露戦争後の双方の相手に対する態度の成り行き、現在の日露の関係、中国の内情と日露両国の中国における利害関係という、3つのテーマについて双方が率直に意見を述べあう機会となった。桂は「今回の旅行は全然私的漫遊にして何等公の使命を帯ふるにあらずと雖とも、日露両国の利害の上に最大の関係を有する国際問題に就きて露国総理大臣と互に胸襟を開きて意見を交換するを得るは殊に欣幸とするなり、意ふに此款晤の結果は何の日か日本当局者か事を決するに当り裨補する所あらんか」と言い、それに対してココフツォフは、「公か朝に立つと野に在るとを問はず将来起らんとする重要事件に対する帝国政府の決意に関し偉大なる勢力を有せられるべきを確信するを以て、今親しく公と肱を把て両国に利害関係を有する諸問題に関し意見を交換するを得るは光榮の至なり」と答えた。

両者は日露戦争のような悲痛な話題にも触れたが、同時に近年日露の親交が深まったことを確認し、また中国問題とその解決に関して互いに自分の立場を明確に表明した。これは若槻が言った「ロシアの政治家と腹蔵のない話合い」にはほかならない。無論私人としてロシアを訪問していた桂は、意見交換を越えた談話をする資格がなかった。しかし「私的漫遊」にもかかわらず、ロシアの政界とコミュニケーションを取り、できる範囲で国交を調整するため努力する動きがあったことも否定できない。すなわち、若槻の回顧録で描かれた旅行の第1目的は誤りではなかったと言えるであろう。

イギリス・ドイツ訪問に対する桂の期待

イギリス旅行の計画については、加藤高明が7月19日に送った桂宛の書簡³⁰がその詳細を明らかにしている。加藤はロンドンでは社交の季節が一週間後に完全に終了し、8月頭に議会在閉会となる状況を挙げ、「皇帝陛下以下政治家其他目星しき人士は、尽く本月末より来月初め頃迄に倫敦を去りて遠近に散在すこと毎年の慣例に有之、八九両月は満都空虚の姿にて、如何なる珍客来るも此間は何人に紹介することも不相叶、従て閣下御来遊相成るも誰にも御面会之ことも無之」と説明し、はじめ9月中旬に予定されていた桂一行の渡英が結局10月に変更されたことに対して喜びを表した。エドワード・グレイ外相も17日に大使館の晩餐会に参加し、桂の来英時期を尋ねた上、同じ問題を指摘した。加藤は、グレイの言葉を次のように伝えた。

八月か九月にては皇帝御不在なる上、自分も首相も何れも不在なり、其処へ御来英相成りたりとて人を集むること逆も出来かたし。然るに、十

³⁰ 千葉2010 : 125-126。

月に入ては初旬には秋期議会も開会の筈に付、首相も自分も在京すべく、又皇帝陛下も同月十日過には一寸倫敦へ御帰可相成（夫迄はスコットランド御滞在）筈に承り居る故へ、謁見も可相叶。

以上の加藤の書簡を見ると、概ねイギリス旅行の趣旨・目的が分かる。それはすなわちハーバート・ヘンリー・アスキス総理大臣、グレイ外相らとの会談、イギリスの国王・ジョージ5世との謁見であった。政党政治の研究に関しては一言も書かれていない。与党であった自由党党首のアスキス首相は、桂の調査に貢献できる人物であったに違いないが、ココフツォフとの会談の内容を考えると、英国総理大臣の場合も外交問題、特に辛亥革命後の中国における両国の利害関係が話の大部分を占めると予測できる。先に述べたように、日本の同盟国であったイギリスで桂の渡欧が多く注目を集め、彼のペテルブルク滞在は地元新聞によって広く報道されていた。この状況で桂は、「政党の楽屋」や「政権の授受の工合」を研究するより、まずイギリス側にロシアで行われた会談が日英同盟を弱体化させるものでないことを説得すべきであったろう。

後年のインタビューで若槻は、西洋の政党に対する桂の興味に触れたが、旅行の随行者の中には政党政治に詳しいエキスパートが1人もいなかったことも認めていた。「向ふに行けば、日本の大使もをるし、色々な人もをるから、自然それから紹介して貰つて誰に会えばいゝといふことはわかる。さうして大勢の人に会つて話したり顔を見たりしてゐる中に自ら解るといふ筆法だらうと思ひます。別にそのはうのエキスパートは誰もをりはせん」³¹。

以上の言葉からは、桂がイギリスの政党の情勢を調べるために何の事前準備もせず、きちんとした調査プランもなかったらしいことが見えてくる。彼がヨーロッパへ出発する時点で、どの程度まで自分の政党を作る覚悟を固めていたのかは判断し難い。その考えを抱いていたとしても、政党政治のことを孜々として研究したいとの姿勢を見せなかったのではないと思われる。その代わりに、成り行きに任せる態度を取った。若槻の言葉を信じれば、イギリスの巨頭らと会談するうちに、政党の話を持ち出してみると何かが分かるかも知れないという程度のものであったということになる。

後藤新平は、欧州旅行に政党の研究という目的がなかったと力説している³²。しかし、イギリスに興味を持っていない後藤がイギリス訪問の重要性を低めるためそのような主張をしたという可能性も考えられる。若槻が「後藤伯はあゝいふ何時でも先に行つてヤアヤア言ふ人ではあつても、後藤は英語は出来ず、英吉利〔イギリス〕のことは知りません」³³と

³¹ 若槻1999：121-122。

³² 鶴見2005：560-561。

³³ 若槻1999：121。

述べたように、鶴見祐輔の『後藤新平』でも、「〔後藤〕は英国流の政党主義者ではなかった。彼は欽定憲法論者であって、多数党が内閣を組織することを、不動の原則とする英国的政治思想に反対であった」³⁴とされているからである。

最後に再び7月25日付けの畑良太郎の書簡³⁵に戻り、訪独の目的について簡単に説明したい。畑が書いたように、桂はベルリンに着いたらまずドイツ皇帝のヴィルヘルム2世との謁見をはたし、そのあと「宰相、外務大臣（…）其他要路之士に御面会之事」がドイツ滞在中の要務となるはずであった。畑自身は、桂の訪問を日独関係の改善に繋げられると期待しており、桂、後藤らとドイツの「要路若しくは知名之士を一堂に会せしめ、以て日独人士の接近親交を計り、延て両国の国交に裨益」させたいと手紙で述べていた。

畑の書簡と若槻の回顧録を比較すると、相違点が見える。若槻がドイツ旅行を主に気晴らし旅行としていたのに対し、畑はドイツの閣員・巨頭と面会することの重要性を強調していた。その点で畑の見方はペテルブルク滞在のパターンに近い。

桂のヨーロッパ訪問は「私的漫遊」として宣伝され、本人もそれを主張していた。それにもかかわらず、旅行の目標について種々の噂が広がり、国内外の新聞は桂が何らかの外交的使命を担っていると書き立てた。当時の史料を見ると、旅行の基本的な目的はヨーロッパ諸国の君主、為政者、閣員らとの会見であったと判断できる。そして、桂が渡欧の副目的として政党政治の研究を考えていたことも十分な可能性があると考えられる。第3次桂内閣が成立したあと、新政党を作る桂の意志が明らかにされる。

明治天皇の崩御

明治天皇の重病は1912年7月20日頃、公にされ、日本の世論を揺さぶった。その日、財部彪海軍次官は上原陸相から「陛下昨夜来四十度以上ノ御発熱御重体ナル」ことを非公式に知らされた³⁶。内務大臣の原敬も同日「天皇陛下去十四日より御病気の処昨今御重体の旨昨夕侍医より上申せり」と渡辺千秋宮内大臣より通知を受けた³⁷。加藤高明は当日2通目の書簡³⁸を桂に送り、東京ロイターの通信者から届いた電報の内容を転送した。朝に来た最初の電報は、天皇陛下が重病で意識不明になったという知らせであった。次に届いた第2の電報は、天皇の病に関する詳述を含

³⁴ 鶴見2005：625-626。

³⁵ 千葉2010：302-304。

³⁶ 財部1983：63。

³⁷ 原1981：239。

³⁸ 千葉2010：135-136。

んでいた。「天皇陛下ニハ本月十四日ヨリ御罹病、昨十八日ハ人事御不省、チフス省ト診断、御体温一〇五〔摂氏40.6度〕、御脈一〇四、御呼吸三八」。

以上の2つの電報は、在英日本大使館に当惑を呼び起こした。当日の朝ジョージ5世が秘書官を日本大使館に遣わし天皇の容態を尋ねたが、加藤は日本外務省より何の報告もなく、ロイター通信の実否を確認することができなかった。桂に書簡を作成する時は、まだ東京からの電報待ちの状態であった。

明治天皇の状態に関するニュースが桂に届いたのはペテルブルクに到着してすぐの、7月21日午後であった。若槻の回顧録によれば、在露大使本野一郎が駅で待っており、それを桂らに伝えた。その状況は彼らの行動を拘束した。ココフツォフとサゾノフとの非公式の会談を除けば、ロシアに着いた全員の活動はホテルで天皇の容態を知らせる電報を待つことに限られたからである³⁹。

日本からのニュースは、交代で陛下の病状の良化と悪化を告げた。丁度そのころ、7月25日加藤高明は桂に手紙を出し、再びイギリスの新聞の切り抜きを同封した。同封された記事はペテルブルクの通信者が送った24日付けの短い報告であり、その記者によると天皇の容態が良くなったらしいことと、続行すべしとの外務省の主張に応じて桂は旅行を続けると決めた。なお、これ以降の旅行は「ただの漫遊」の装いは捨てることにされた⁴⁰。

桂は恐らく外務省から何等かの指示が来ると期待していた。とうとう25日になって、天皇の回復の見込みが薄いため、東京で桂ら呼び戻すとの決定がなされた。寺内正毅は、日記に記述している。「午前十時参内山県公ト桂公帰朝ノ件ニ就キ意見ヲ交換シ、発電方ヲ西園寺首相ト協議シ之ヲ決シ、外務大臣ニ発電ヲ依頼ス」⁴¹。例の7月25日付け加藤の書簡も間接に桂に帰朝を促していた⁴²。

こんな状況の中で桂は帰国を決心するしかなく、大急ぎで一週間に一本しかない特急列車の切符を予約し、「貸切ではなく、護衛もつかない」まま28日にペテルブルクを発ち、日本に向かった。3日後に天皇が崩御したとの知らせが届いた。若槻はそれを次のように記している。

丁度ウラル山麓あたりで、シズラン〔Syzran〕とかいう駅に朝の七時ごろ着いたら、モスクワの総領事館から追尾電報が来て、それで明治天皇のおかぐれになったことを知った。車内のこととて、着けるべき喪章もない。ただ謹慎と黙祷を捧げるのみである。マンチュリ〔満州里〕まで満鉄

³⁹ 若槻1950：181-182。

⁴⁰ 千葉2010：136-138。

⁴¹ 寺内1980：562。

⁴² 千葉2010：136-138。

の社員が出迎えにきて、喪章と、御大患以来の東京の新聞とを持って来てくれた。みんな貪るようにそれを読んだ。行くときには、非常に愉快だった旅行も、帰りはただもう絶望のうちに、安奉線から朝鮮を経て、黒一色の内地へ帰って来た次第であった⁴³。

桂の帰国と内大臣兼侍従長への任命

日本に急ぐ桂らはようやく8月10日に神戸港に到着し、神戸から特急列車で東京に赴いた。東京の新橋駅に着いたのは11日の朝6時頃であった⁴⁴。若槻の回顧録によると、電車が浜松に着いた時、迎えに来た寺内正毅がそれに乗り、首都まで同乗した。寺内は桂と長い間話をしており、旅行の随行者たちがその話の内容をたずねると桂は内大臣にされることになったらしいと答えた⁴⁵。

しかし「財部彪日記」には『古風庵回顧録』の描写と相違する記述が見られる。財部は9月27日の夜上原陸相を訪問し、上原は桂の宮中入りに関して、「八月十一日（？）桂公帰朝ノ際、寺内伯途中迄出迎ノ節ハ、桂公ノ侍従長候補ノ事ハ何モ寺内伯サヘ不知ノ事ナリ」⁴⁶と伝えた。これによれば、桂は自分の侍従長任命について東京に到着した後に知らされた可能性もある。

桂を宮中に入れることは、恐らく山県有朋1人によって計画されたと考えられる。彼は明治天皇死後に政界に漂っていた沈滞気分を利用し、桂らが東京に帰る前に動いた。帰朝した桂も、他の元老たちも、侍従長の交代に関しては、既成事実を前にして、何の対応もできなかったと思われる。山県はまず腹心の部下、平田東助を通じて桂に面会を求めた。平田は桂に書簡を出し、「目白老公〔山県〕より御帰着後他に御面接前に於て、至急後内話申上候様との要件有之、御疲労之際恐縮之至の奉存候得共、新橋御着之際小生に御邸に参趨仕候間、暫時御面謁を賜り度予め奉願候」⁴⁷と山県の意を伝えた。

この書簡から、山県がどれだけ大急ぎであったかが分かる。桂は長旅の後に休息する時間さえなく、直ぐに山県を訪れた。

山県は同じ8月11日に他の元老、大山巖、井上馨、松方正義に自身の考えを伝えた。財部の日記に、松方が財部の舅、山本権兵衛に会議の内容を伝えた次のような記載がある。

⁴³ 若槻1950 : 183。

⁴⁴ 田2008 : 194。

⁴⁵ 若槻1950 : 184。

⁴⁶ 財部1983 : 87。

⁴⁷ 1912年8月11日付桂太郎宛平田東助書簡（千葉2010 : 323）。

元老会議、山県公ガ桂公ヲ侍従長ニ推選。
山県公元老ヘノ勅語ヲ賜ハリタキコトヲ發議、大山公ハ之ヲ固辞、井上、
松方両侯ハ無言ナリキト云フ⁴⁸。

世論の批判

1912年8月13日に桂太郎は、公爵徳大寺実則の後継として内大臣兼侍従長に任命された⁴⁹。その任命は政治の経験がない新帝に老練な重臣の輔弼が必要であるという風に説明されたが、山県はもう1つの理由として徳大寺現侍従長の老年を挙げていた。徳大寺は既に72歳の高齢に達しており、身体が衰え職を続ける体力もなく、明治天皇の大喪儀に各国から使節が来朝する際に、任務を十分果たせない恐れがあった⁵⁰。

ただし、桂の急な宮中入りが混乱を招いたのも、事実であった。原敬は13日にそれを知り、日記に「桂太郎侍従長兼内大臣に任ぜらる、昨日彼が宮中府中の事を云々せしは何の意味なりしや判然せざりしが、此の任命によりて後の談話も了解せられたり、山県一派の陰謀にて枢府並に宮中を一切彼等の手に収めんとの企に出たること明かなり」⁵¹と書いた。また翌14日に原が西園寺を訪問した時、西園寺は徳大寺侍従長辞職について兄が確かに高齢のため辞職もやむを得ないと感じていると述べたが、同時に「是迄藩閥が其職をねらつて種々の企をなしたる事あれども徳大寺は一身を捧げて奉仕するの誠意あり、又先帝陛下も御許容なきにより、現職に止居たる」⁵²ことを指摘し、これが山県の藩閥人事であることを示唆していた。

「財部彪日記」は、海軍の中に同じ懸念があったことを示している。財部自身は、桂の任命が「元老連協同一致ノ結果」ではなかったと信じていた。8月13日の夜、桂の任命について心配した海軍大学校長・八代六郎中将が財部を訪問した。両者は、同日西園寺総理に発せられた勅語に「宮中府中宜ク協力相裨補シ」という言葉が含まれている意味について議論した⁵³。

原や財部が感じていた不満は、世論も同様に感じていたので、すぐに新聞紙上に反映された。「藩閥」が皇室に影響を及ぼそうとしているという声があがり、宮中・府中の別が乱されたとの訴えもなされた。『時事新報』のジャーナリストで政友会の衆議院議員、そして後に憲政擁護

⁴⁸ 財部1983：72（1912年8月11日条）。

⁴⁹ 同日桂と大山巖は元老に任命された。山県有朋、松方正義、井上馨を含め、元老の人数は5人に上がった。

⁵⁰ 原1981：245（1912年8月14日条）。

⁵¹ 同上（1912年8月13日条）。

⁵² 同上（1912年8月14日条）。

⁵³ 財部1983：72-73。

運動の発案者の1人になった小山完吾は、第二次世界大戦後に出版された日記で次のように述べている。

いま、桂公の心情を素直に解釈すれば、明治天皇崩御の後ではあり、大正天皇は病弱無経験の新帝のために臣節をつくし奉らんと的心境であつたかと察せられる。

しかし世間は皮肉なものである。まだ歳も老いたともいはれぬ桂公が、日露戦争の功績によりて侯爵になつたばかりで、その後わずか数年の間に、トントン拍子の勢で、キミ公爵まで駆け上り、政治慾とても人一倍旺盛の、まだ生々しき政治家が、突然大宮人となつて、内大臣になりきるといふのは、ちよつと意外だといふのが一般の感想であつた。

そこで、口善悪なき政界の雀どものなかには、赤い信女はいつまで続くか、宮中府中を攪乱することがないか、といふやうな陰口も、さかんに行はれてゐた⁵⁴。

当時の新聞記者が桂の任命をどう見たのかを更にみてみよう。『国民新聞』は、それが彼の政治活動の終わりを意味すると分析した。桂は「まったく政治界の一切を絶縁したるなり」⁵⁵、すなわち宮中に入ることによって、もはや政治家として復帰することはないと予想した。一方それに対して、『万朝報』は、桂が完全に政治と手を切つたなどということは信じがたいと論じた⁵⁶。

『朝日新聞』は特に強く桂の就任を批判し、新内大臣について酷評的な記事を掲載した。それらの記事では、宮廷政治が政治を牛耳る恐れがあると主張され、宮中・府中の別が乱れるという懸念も表明された。

『東京朝日新聞』は、「桂公は政党の総裁にして内閣の首班たる西園寺侯と情意投合は愚か生死不渝を誓ひ間接政友会内閣を操縦しながら宮中に入て御璽国璽を尚蔵して常侍輔弼するの任に膺り宮中と府中とに互りて政治は愚か帝国の大顧問たる訳なり」⁵⁷と、桂の権力の強大化を非難した。

続いて、山県が桂を内大臣に選んだ意図が非立憲的であるという疑いが示され、八代中将と財部が議論していた例の勅語が問題にされた。

「桂公を選任せし意味を明白にするものは西園寺首相に賜はりし勅語中『宮中府中協力相裨補し云々』との一節なり。元来明治十八年の官制以来宮中府中を区別すべしとの意は是迄屢明かにせられしも、協力相裨補するとのことは今回を以て嚆矢とす。而して之前後に於ける山県公の言動に見て其の立憲政治に不足を称へたる所と照し合すれば、明白に立

⁵⁴ 小山1955 : 292。

⁵⁵ 「桂公の心事」1912年8月14日付。

⁵⁶ 「桂内大臣種々評」1912年8月14日付。

⁵⁷ 「桂宮中入」1912年8月14日付。

憲政治の変体を作りて宮廷政治の基礎を作る第一歩たるを認め得べきが如し」⁵⁸。

新聞の桂・山県に対する攻撃は当局の反応を呼び起した。8月15日の午後、14日・15日の『東京朝日新聞』は安全秩序に害ありと見なされ、発売禁止となった。『大阪朝日新聞』にたいしても14日の夜から同じ処置がとられた。

9月5日に後藤新平が桂に書簡を送り、2通の文書を同封した。同封の文書の1通目は、桂が内大臣兼侍従長になった後の政界の風景がどのようなものであったのかを示している。

桂公宮中奉仕後の政局が如何に推移すべきかに就ては、貴族院各会派の領袖并に衆議院各党の有力者に於て益々研究観察に耽りつゝあるが、今や暫く桂公の奉仕は、山県公等の排斥的幽閉策にあらずして、自己の政治的系統の根底を鞏固にし、一に新帝陛下の御信頼厚からしむるのみならず、延て自己系統の発展に資せんとするの方針に出で、同時に桂公は成るべく宮中に蟠踞し、その後継者をして遂に政権を把握せしむるの心算なることをも明瞭と相成り候様信ぜらるゝに至り申候⁵⁹。

以上の文書は、小山完吾の観測と一致する。しかし、ここで注目を引くのは、桂は山県によって宮中に押し込められたにもかかわらず、政界では彼を天皇の側近の立場を利用することで、自身の政治的地位の強化をはかろうとする陰謀家として見なしていた点である。桂は宮中入りしたために新聞等から批判の的となったが、彼を内大臣兼侍従長に就任させた山県の意図は桂を政界から遠ざけるためであった。

桂自身には宮中入りの意志がなかったという話はほかにもある。特に桂の支持者にそのような意見が多くみられる。例えば、徳富蘇峰の『公爵桂太郎伝』がそれである

聞く所に抛れば、先帝在世の日、嘗て屢と公を以て、今上に奉仕し、之をして常時輔弼の任に当らしめんと、聖慮を漏らさせ給ひしと云ふ。是を以て公の帰朝するや、皇太后、具さに其の情を語り、之に告ぐるに先帝遺志の在る所を以てし、今上亦公に対して、常時輔弼の任に当るべき旨内示ありき。而かも公は固辞して、敢て当らず、却て公爵山県有朋を推せしも、肯んせざるを以て、終に大命を拝するに至りしなりと云ふ⁶⁰。

鶴見祐輔の『後藤新平』にも、上記に類似する内容がみられる。それによると、後藤は桂の宮中入りを思いとどませようとし、桂自身も最

⁵⁸ 同上。

⁵⁹ 千葉2010：177-182。

⁶⁰ 徳富1967：595。

初辞退し、逆に山県を内大臣兼侍従長に推選した。しかし、最終的に山県と西園寺の熱心な説得に折れ、ついに任命を受諾したのである⁶¹。また当時桂に近い官僚政治家の田健治郎は、同様の話を貴族院議員・沖守固男爵より聞いている。沖は8月21日に田を訪問した時、侍従長の交代は桂・山県の軋轢によるもので、恐らく山県が政治力を拡大した桂を嫉妬したためにこの話が起きたのだと語った⁶²。

一方、在露日本大使本野一郎は、桂が内大臣兼侍従長となることは、桂自身には不本意ではあろうが、任命されたからには内大臣として国家のために心身を捧げるようにと桂に進言した。「御帰朝後早速内大臣に御拝命之義に付ては、世上種々論議ありと雖も、目下之場合誠に止を得ざる事にて、閣下御一身上之御都合より申上候へば、極て御迷惑之御事は申迄も無之事と存候へ共、総ての情況より觀察仕候へば、閣下に於て万々御辞退難相成理由之存在致候事と確信致居候。為邦家何卒此度之重任、完全に御勤めあらんこと衷心奉祈候」⁶³。

もちろん、桂の任命の背後に何の陰謀もなかったという指摘も存在する。その例としては、若槻の下記の回想があげられる。「幼帝をさしはさんで、桂が政権を専らにするのだとか、或は桂を政界から葬るための陰謀があったのだとか、いろいろに噂されたものだが、しかし桂公の進退は、皇后の御言葉に感奮し、誓って皇室のために、一身を捧ぐるの決意に出でたものに外ならないのである」⁶⁴。

その「皇后の御言葉」というのは、桂が帰国後参内した時に美子皇太后が桂に告げた話のことである。皇太后は桂に、明治天皇は病気が悪化して以来一言も話さなくなり、ただ一度だけ「桂はロシアに着いたか」と質問したと伝えた。桂は涙を流しながらそれを聞き、自ら新帝を輔弼するために政界から退き、内大臣の任命を受けることを決めたというのである。若槻は、以上の内容を直接桂から聞いたと強調している。

宮中の桂太郎

桂自身も、表向きには宮中入りは自分の意志でなされた選択であったと主張していた。8月16日彼を訪問した田健治郎に対して、桂は政界から引き下がり、内大臣兼侍従長の任命を受諾しなければならなかった事情を詳しく説明し、「此の際、新帝に常侍し輔弼の事、国家の最大緊要事と為し、百般の政治的希望を挙げ、甘んじて犠牲と為り、謹んで此の大任を」受けたと述べた⁶⁵。またその2日後原敬は桂に面会し、陸軍二個師

⁶¹ 鶴見2005 : 594。

⁶² 田2008 : 198。

⁶³ 1912年9月15日付桂太郎宛本野一郎書簡（千葉2010 : 345-347）。

⁶⁴ 若槻1950 : 185。

⁶⁵ 田2008 : 196。

団増設の要求などについて話し合ったが、その時、桂は「今後全く政治に関与」しないことを明白に宣した。にもかかわらず、これを聞いた原は桂の言葉が疑わしいと記している⁶⁶。

続いて、25日政友会の野田卯太郎が桂と面会したが、桂は野田に「予の宮中奉仕に対し世上種々の揣摩臆測を為しつゝあるも、何等弁解の必要を認めず。予は一意専心至尊陛下のために補翼の大任を尽すと共に、従来の政治的関係を忘れ、自己の残骸を皇国と国家とに捧ぐるの覚悟を為し居れり。故に従来の政治的関係者との面談をも憚りつゝあり」⁶⁷と述べた。

一方、後藤新平のもとにもたらされた情報によれば、桂の宮中入りにつき世間で山県と桂の関係を云々しているのを聞いて憤慨した山県は「世間が何んと云はふが、自分は桂をして長く輔弼の重任に在らしめ、予も亦た老軀を至尊陛下に捧げん決心をなせり」と口外したとのことであった⁶⁸。

実際桂にとって宮中にいることは、政治活動から距離を置くという結果を招くこととなった。1912年8月ごろ桂がロシア大使マレフスキー＝マレヴィチと交わした会話から、彼の当時の日課がある程度分かる。桂は政界から離れ、衆議院の政党間の政争にも関わりなく、毎日午前9時から午後3時まで宮中で働くことになり、天皇に出された全ての上奏書、また天皇が下した全ての通達・命令が彼の手を経由することになった。そのため桂は、宮中と政府のあらゆることに関して詳しい情報を知ることになった。彼は職務に忙殺されたが、政治に関して何の経験もない若い天皇には老練な輔弼が必要だと分かり、全力を尽くすことを誓った⁶⁹。桂は1912年9月11日付けの山県宛の手紙でも「毎日々々朝より夕方に掛け」て侍従長の職務で忙しく、暇な時間がないと述べている⁷⁰。

また徳富蘇峰は『公爵桂太郎伝』で、桂の勤職務を次のように描いた。

其当面の用務は、今上御日常の事、及び今上御学問の事、宮城御引移の事、新に東宮御所を定め、皇太子を迎へ奉る事、並に東宮職官制改正等の事是れ也。公は下問に奉答して、聖旨を奉し立案画策する所あり。殊に御学問の事に関しては、改めて学問進講の方針を明示せんことを以てしたり⁷¹。

⁶⁶ 原1981：246-247。

⁶⁷ 1912年8月28日付桂太郎宛後藤新平書簡（千葉2010：176-177）。

⁶⁸ 同上。

⁶⁹ 1912年8月23日〔西暦9月5日〕付セルゲイ・ドミトリーエフ・サゾノフ宛ニコライ・マレフスキー＝マレヴィチ書簡（Molodiakov 2005：83-86）。

⁷⁰ 『山縣有朋関係文書』2005：380-381。

⁷¹ 徳富1967：601-602。

おわりに：ヨーロッパ訪問の余波

1912年7月に桂が後藤新平、若槻礼次郎などと一緒にヨーロッパへ向かったことは、日本の政界を一変させる出来事の連鎖の発端となった。それは彼の4回目の渡欧であり、政治的使命を帯びているという噂が少なくなかったが、本人は欧州諸国の国王・政治家と自由に意見を交し合うための、ただの「漫遊」に過ぎないと主張していた。しかし、その旅は類稀なる悪運に見舞われた。桂らがペテルブルグに到着すると、明治天皇の健康状態が悪化したと知らされ、道半ばで帰国することを決めたのである。だが彼らが日本に帰り着いたのは、天皇の死後であった。

ロシアから大急ぎで帰国した桂は、東京に着くなり山県有朋によって内大臣兼侍従長に奏薦されたことを知った。山県は、桂を政治から隔離するためにそれを企画したと思われ、桂の出国と明治天皇の崩御は、山県にとって桂の政治的役割を制限する好機となったに違いない。しかし、桂はそれを知りながら宮中入りを受け入れただけでなく、自らの決意によるものであったと主張し、政界からの訣別宣言までした。彼が山県の策略に抵抗しなかった理由は、以下のように考えられる。

桂は大正天皇在位の最初の12日間、東京にいなかった。不意をつかれ宮中入りを提案された際、どう反応すべきか考える時間がなかった。そして、その任命を固辞するすべは、恐らくなかったであろう。既に指摘されたように、『公爵桂太郎伝』には皇太后が桂の任命を支持し、桂を説得したと書かれている。若槻も任命を受諾する桂の決意に関しては、皇太后の役割を重視している。すなわち、皇太后は政治が未経験の新帝が天皇の職務を遂行できないことを恐れ、経験豊富な重臣たちの援助と保護を確保するために動いたのだと思われる。その動きは、表面に出てこないように政界の背後で行われたが、桂の宮中入りを批判していた「原敬日記」にもそのことが見える。8月13日に西園寺は原に「皇太后陛下より首相に対し、陛下は未だ政治に御経験もなき事に付十分に輔佐せよとの宣旨ありたり」⁷²と伝えた。内閣総理大臣にさえ新帝の補佐を頼む皇太后は、桂を輔弼役にすることで大いに安心したのではないだろうか。

そのような状況に置かれた桂は、就任を断ることができなかったであろう。内大臣に任命された彼は、先帝に忠実であり、明治天皇から受けた好意と優遇に報いたいという気持ちもあったと想像できる。桂は、自分を宮中に入れる計画が山県の陰謀だと知っていたとしても、最終的には皇太后の願いを拒むまでには至らなかった。却って、大正天皇のために忠誠を尽くすことに決め、一時は本気で政治から離れることを決心したのであった。

その任命は日本の世論に衝撃を与え、桂と山県が影響力を皇室に拡張しようしているとの批判の声が上がった。その成り行きはとりわけ桂に

⁷² 原1981：245。

とって不幸な結果となり、4ヶ月後に桂の総理大臣任命に反対する民衆運動に発展するのである。西園寺公望は『自伝』で、桂の「失策」がその旅行から始まったという意見を述べている⁷³。すなわち、訪欧とそれに次いだ宮中入りは、桂にとっては最終的に敗北に至る過程を招いた2つの出来事であったと言えるであろう。

1912年12月に、二個師団増設問題をめぐり、第2次西園寺内閣が陸軍の圧力によって倒された時、西園寺公望の後任として桂太郎が首相に奏薦され、3度目の内閣を組織した。桂はすでに内大臣兼侍従長として宮中に入っていたので、宮中と府中の別が乱されたとする批判の声が再び各方面から上がった。さらに詔勅を利用して自己の政治目標を達成しようとしたとして、桂総理の政治的手段に対する非難が世間に広がった。

世論の否定的な態度に応じて、院外の政治家、実業家、ジャーナリストが中心になって、藩閥勢力の非立憲的な政治に反対する憲政擁護運動が起こり、速やかに全国に広がった。同時に、政友会と衆議院の第2党、国民党は桂内閣を非立憲的と非難追及し、内閣不信任案を議会に提出した。衆議院で支持を確保できず、しかも民衆の激しい抗議行動に遭った桂は、とうとう内閣の総辞職に追い込まれたのである。第3次桂内閣は、在任期間わずか62日間であり、1945年の東久邇宮内閣の総辞職まで歴代第1位の短命内閣であった。

後任総理大臣には山本権兵衛が任命された。桂自身は、それ以降自分の政治的地位を復旧することができず、1913年10月に脳梗塞を起こし、病死するに至った。

引用史料・文献一覧

史料集・書簡集・日記

小山完吾（1955）「西園寺公と私」、『小山完吾日記 一 五・一五事件から太平洋戦争まで 一』東京：慶応通信。

寺内正毅（1980）『寺内正毅日記—1900—1918—』京都：京都女子大学。

原敬（1981）『原敬日記』第3巻、東京：福村出版。

財部彪（1983）『財部彪日記—海軍次官時代—』下巻、東京：山川出版社。

Molodiakov, Vasilii (ed.) 2005. Katsura Taro, Goto Simpei i Rossiia: sbornik dokumentov, 1907-1929, Moskva: Airo-XXI.

『山縣有朋関係文書』第1巻（2005）東京：山川出版社。

宇都宮太郎（2007）『日本陸軍とアジア政策—陸軍大将宇都宮太郎日記—』第2巻、東京：岩波書店。

⁷³ 西園寺・小泉・木村1949：164。

- 田健治郎 (2008) 『田健治郎日記』第 2 卷、東京：芙蓉書房出版。
千葉功編 (2010) 『桂太郎関係文書』東京：東京大学出版会。
千葉功編 (2011) 『桂太郎発書翰集』東京：東京大学出版会。
『上原勇作関係文書』 (2011) 東京：東京大学出版会。

新聞

- 『時事新報』1912年7月22日付。
『東京朝日新聞』1912年6月7日付、7月26日付、7月29日付、8月14日付。
『国民新聞』1912年8月14日付。
『万朝報』1912年8月14日付。

伝記・自伝・回想・インタビュー

- 西園寺公望・小泉策太郎著、木村毅編 (1949) 『西園寺公望自傳』東京：大日本雄弁会講談社。
三宅雪嶺 (1949) 『同時代史』第4巻、東京：岩波書店。
若槻礼次郎 (1950) 『古風庵回顧録- 若槻禮次郎自傳- 明治、大正、昭和政界秘史』東京：読売新聞社。
徳富蘇峰 (1967) 『公爵桂太郎傳』坤巻、東京：原書房。
若槻礼次郎 (1999) 「男爵若槻礼次郎談話速記」 (広瀬順皓編『政治談話速記録』第8巻、東京：ゆまに書房)。
鶴見祐輔 (2005) 『正伝後藤新平』第5巻、東京：藤原書店。

研究書・論文

- 由井正臣 (1970) 「二個師団増設問題と軍部」 (『駒澤史学』17号)。
山本四郎 (1970) 『大正政変の基礎的研究』東京：御茶の水書房。
北岡伸一 (1978) 『日本陸軍と大陸政策- 1906-1918年- 』東京：東京大学出版会。
坂野潤治 (1994) 『大正政変- 1900年体制の崩壊- 』京都：ミネルヴァ書房。
桜井良樹 (1997) 『大正政治史の出発- 立憲同志会の成立とその周辺- 』東京：山川出版社。
Lone, Stewart 2000. *Army, Empire and Politics in Meiji Japan: The Three Careers of General Katsura Tarō*, London: Macmillan.
内藤一成 (2005) 『貴族院と立憲政治』京都：思文閣出版。
小林道彦 (2006) 『桂太郎- 予が生命は政治である- 』京都：ミネルヴァ書房。
千葉功 (2012) 『桂太郎 - 外に帝国主義、内に立憲主義- 』東京：中央公論新社。

English Summary of the Article

Janusz Mytko

The Last European Journey of Katsura Tarō

Katsura Tarō's prime ministership, marked by the signing of the Anglo-Japanese Alliance, the victorious war against Russia, and the annexation of Korea, makes him one of the most prominent politicians of his era, second only to the unquestioned leader of the influential Chōshū clique, Yamagata Aritomo. When, after his second term, Katsura left for Europe in July 1912, many saw this voyage as an attempt to rest from his activities, and an opportunity to exchange views with European statesmen before his return to politics.

This essay's aim is to provide an insight into the circumstances surrounding the journey and Katsura's nomination to the Court, and to discuss the reasons that sent him overseas, particularly his alleged plan to research the British party system, connected with ideas concerning the creation of his own party. On his return, Katsura, virtually without protest, agreed to abandon these ideas in order to assist the new emperor as a courtier, even though he realized this would hurt his political career. Clarification of all the factors involved in this nomination is the author's second aim.

Key-words: Katsura Tarō, European journey, Gotō Shinpei, Wakatsuki Reijirō, Emperor Meiji's death.